

『ガネフォ』随想

ガネフォ水球

古川 康之 (81歳)

(中央大学出身)

ガネフォの事で、いつも真っ先に頭に浮かぶのは参加した中央大学が4名の内、すでに菅久先輩、後輩の田中君、浜野君の3名が永眠されていることです。

残念で、残念でなりません。

ご冥福を心よりお祈りいたします。

私のガネフォは、菅久先輩の一本の電話から始まりました。

『ガネフォに参加するからお前も来い！』

先輩の命令なので『はい、行きます！』と返事はしたものの、初めは「外国に行く」「外国のチームと試合ができる」「外国を見聞できる」という単純な気持ちからでした。ガネフォの事が理解出来たのは3～4日経ってからでした。

I O C (国際オリンピック委員会)は半年前にインドネシアをI O C加盟国としての資格停止をしました。そしてガネフォに参加した選手は、オリンピックへの出場を認めない決定をしていました。インドネシアは、日本選手の参加を熱望し、スカルノ大統領が日本政府に参加を強く要望していました。ガネフォは単なる国際スポーツ大会ではなかったのです。

これは容易な事ではない。ガネフォについて、日本政府は、スポーツには干渉しない立場であるが、当時のインドネシアとの関係から、ぜひ参加してもらいたいという本音が見え隠れしていました。しかし、翌年の東京オリンピックを控え、スポーツ界は参加に大反対、参加選手に大学のOB会からも反対の圧力、世論も政治とスポーツは、はっきり区別すべきと批判的な意見ばかりでした。

当時、私は大手証券N社に入社して3年目でした。会社の水泳部に所属しており、部員の中に来年の東京オリンピックに出場内定の選手も居り、私が参加する事で大変な迷惑をかける、どうすべきか葛藤し、悩みました。しかし、菅久先輩の『我々は、インドネシアとの架け橋になるぞ！！』との熱い想いに胸を打たれ、「人生は1度だけだ、行動するのは今しかない！」と自分に言い聞かせ、決意を新たにしました。

退職を覚悟で、水泳部長で、直属の上司でもあるG課長に事情を説明し、自分の決意を述べたところ、なんと、快く了解してもらい『胸を張って行って来い』と激励され、45日間の有給休暇と、会社からの餞別支給の手配までしてもらい

ました。未だ半人前の私の我儘に特別の配慮を頂き感涙した事、忘れることは出来ません。

元号も昭和から平成そして令和となり、あれから半世紀余りも経過して、ガネフォは遠い遠い思い出になりました。余生を送る今、思い出すことは、海外へ行った思い出よりも、何故か帰国してからの事の方が、強く心に残っています。

入社3年目とは言え、営業職の私は、微力ながらも売り上げの責任を担っていました。G課長はじめ、職場の先輩・同輩に迷惑をかけた分遅れを取り戻し、また、会社へ恩返しをしなければ、との想いを肝に銘じ、わき目もふらず職務に邁進しました。この体験は、学生気分のような甘い考えを根本から叩き直し、仕事の厳しさ、そして社会の厳しさを自分に教えてくれました。

自分が大きく成長出来たきっかけとなり、その後の人生で障害にぶつかる度に、あの20代の頃の一途な情熱と行動を思い出しては、心の支えとし、励みとしました。私の人生の心の財産です。

G課長は私が社会人になって初めての上司で、しかも水泳部長と言う事もあり、仕事の「いろは」をはじめ、公私にわたりご指導をいただいた尊敬する大恩人です。

私の人生の礎は、この時の指導で培われたと言っても過言ではありません。

すでに20数年前に他界されており、ご恩返しをする事も出来ず、唯々、ご冥福をお祈りするばかりです。

「ガネフォ最終本」に投稿するにあたり、今一度ガネフォの事について、私なりにいろいろ文献を探してみました。しかし、「GANEF0」という国際スポーツ大会が開催されたという事実は明らかにされていますが、日本のスポーツ界にどのような影響や意義があったかについての詳細な検討がされたという文献は見当たりませんでした。

半世紀という時間の経過で、完全に風化されたのでしょうか・・・？

我々はガネフォに参加するに当たり、水連（日本水泳連盟）に脱退届を提出しましたが、受理されず、水連は我々を「アマチュア資格剥奪」と「永久除名」の処分にしました。（1972年に復帰許可され、全員復帰しました）

その時の水連の処分は、我々の行動が

- ① オリンピック憲章のアマチュア規定に抵触する。
- ② 翌年のアジア初のオリンピックを東京で開催する障害になる。

という大きくはこの二つの理由で処分されたものと理解し、当時の世論の動向からもやむなしと納得していました。しかし、自分にはこの事が、ずっと心の片隅に小さなトゲとして残っていました。

時は流れて、ガネフォから11年後の1974年（昭和49年）IOCはオリンピック憲章から、オリンピック精神の金科玉条とも言うべき『アマチュア規定』を削除しました。

確かに1952年の第15回ヘルシンキ大会にソ連や東方の社会主義諸国が参加して以来、アマとプロの境界が曖昧になり区別が困難になってきた為、事実上プロに等しい所謂「ステート・アマ」問題が長い間議論されていました。

IOCはこの議論に決着をつけたものと思います。

この事は、正式にオリンピックにプロ選手参加の道を開けたのです。

そしてオリンピックのあり方を変えた大きな変化と言えるでしょう。

私は、ガネフォの事を思い出し、一抹の虚しさを禁じ得ませんでした。

当時、日本の世論は批判的でIOCに遅れる事12年後の1986年（昭和61年）に漸く新しい『日本スポーツ憲章』を制定し、アマチュア規定を廃止しました。

スポーツ選手の事をプロ、アマ含めてアスリートと呼ぶようになりました。

今や10代の若い選手が多額の懸賞金や報酬金を得る時代になりました。

そして、昨今は企業がスポーツを利用し、スポーツ側もうまく企業を利用するという構図が当たり前になりました。

来年の東京オリンピックも酷暑の夏に開催されます。アスリートファーストよりスポンサーの都合が優先されている様に思えてなりません。

純粹にスポーツを楽しむ選手が居なくなるのでは？と危惧されてなりません。

スポーツの将来はどの様に発展するのでしょうか？

「アマチュア」という言葉も死語になったのでしょうか？

以上 昭和な老人の「つぶやき」でした。

末筆ながら、皆さまの健康と、長寿をお祈りいたします。

素晴らしいガネフォ会の皆様に感謝しております。

お世話になりました。ありがとうございました。

今の心境を詩にしました。

この縁 ^{えにし} 心に刻むぞ ^{むね} 永久に ^{とこしえ}

同志と重ねた 誇りの絆を